ラオスのこども通信

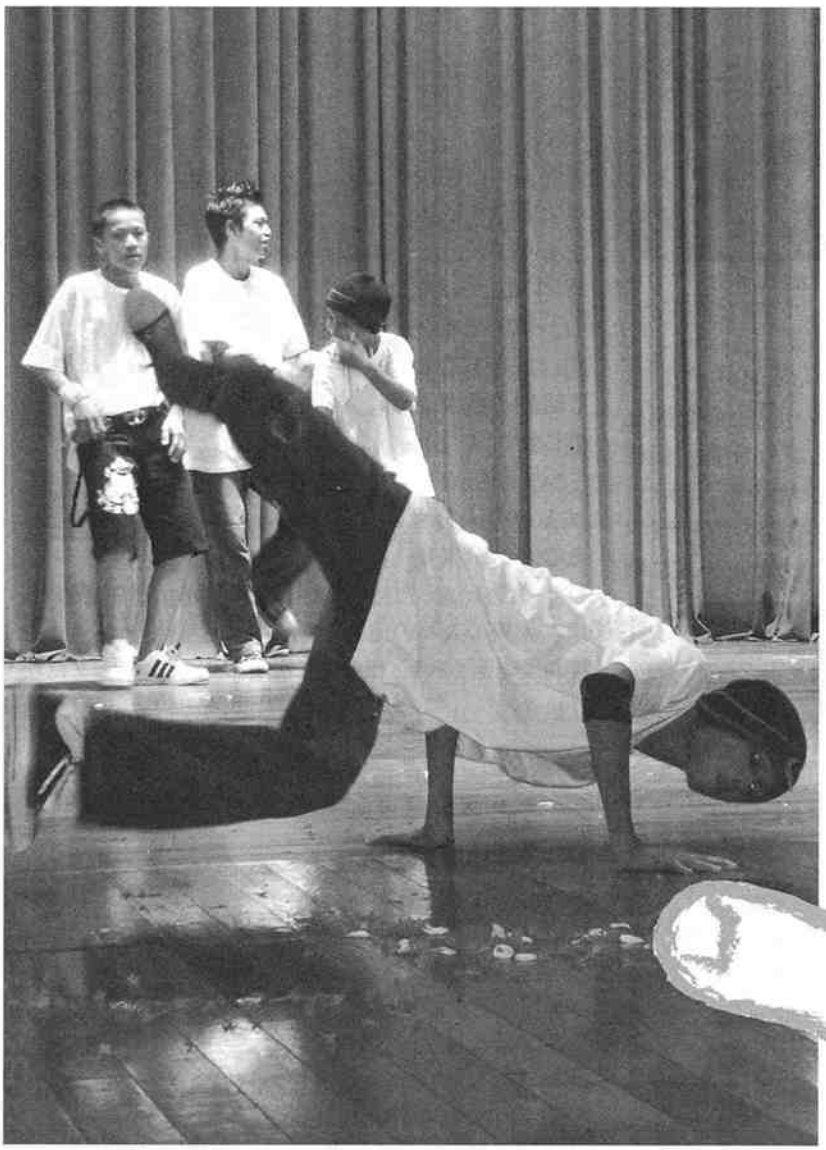
41号
2008年 1月発行

発行：特定非営利活動法人 ラオスのこども 〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12, 303 TEL/FAX 03-3755-1603

特集　25年のあたたかいご支援、ご協力とともに……2

ラオスのこども前史……4
出版プロジェクト……6
読書推進プロジェクト……7
ラオス国際協力研修報告……8
国内の活動……9
支援者のおたより/事務局より……10、11
寄付者・協力者のみなさん ……12

ありがとう 25周年



25周年の記念イベントで、元気に踊る子どもたち（ヴィエンチャン）

支援活動を始めて25年 何ができた？ そしてこれから

1982年に日本の絵本を送ることからスタートしたラオスへの支援活動は、1990年代に出版、子どもが集う場づくり、教員へのトレーニングへと展開し、2000年代に、学校教育のカリキュラムへの提言にいたりました。そして今、この四半世紀を踏まえて、さらに一歩を進めようとしています。

特定非営利活動法人**ラオスのこども**は、子ども自らが学ぶ力を伸ばしていくために、ラオスで、「絵本、紙芝居などの出版」「図書室」「集い楽しみ学べる場」などの支援を行っています。

特　集

25年にわたる活動は、あたたかいご支援、ご協力とともに

記念イベント in LAOS

今日、ラオス各地の小学校で、子ども文化センターで、楽しそうに読み聞かせをしている先生や子どもたちの姿があります。また、校長先生が読書を重視し、図書専任教員を配置するようにもなりました。家庭文庫を開く家族があらわれています。

さらに、私たちが教育行政に働きかけていた、教員養成学校で読書指導の教科のカリキュラム化が実現するなど、時間をかけながらも着実な成果を上げています。

ともに活動し、また様々なかたちで協力、支援をしてくださったみなさんのおかげです。ありがとうございます。

8月4日（土）、ヴィエンチャンの国立文化ホール、朝9時30分、ホール1階はほぼ満席でラオスのこども25周年記念イベントはスタート。当会ラオス事務所代表のダラーによる活動説明に続いて、ラオス教育省副大臣、情報文化省事務長、国立図書館長から祝辞をいただき、会の代表チャンタソンがこれまでの活動を振り返って挨拶をしました。

たくさんの人が会場に集まりました

◇古語の朗読とヒップホップダンス

式典の後は、ヴィエンチャン都の子ども教育開発センター（CEC）などの子どもたちが、合唱、伝統舞踊などを披露。なかでも評判だったのが、ラオスの英雄伝、シンサイの朗読でした。古語の詩をラオス語の美しいリズムで40人の子どもたちがリレー式に朗読をすると、30分を超える長さにもかかわらず、会場は静まり返って耳を傾け、そして大きな拍手が贈られました。

元気に歌を披露しています

さらに、この古語の詩をラップ調の曲にのせて歌う新しいプログラムでは、ステージでかっこよくヒップホップダンスを踊る少年たちの姿に、客席全体が盛り上がりました。

◇本への高い関心、25年の成果

ロビーでは、当会が出版した図書の販売も行い、子どものために購入する親の姿が少なくありませんでした。ヴィエンチャン市内では、図書を購入するということが珍しいことではなくなっている状況に、25年にわたる活動の成果を感じます。

このイベントには1,000人を超える人々が来場してくださいました。準備期間が短かったにも関わらず、大勢の人々の協力のもと、とても盛大なイベントを開催できたことは、ラオス事務所の大きなステップになりました。

会場に遊びに来た子どもたち

ありがとう25年　子どもたちと未来へ

記念の集い
東京にてー

11月17日(土)、JICA地球ひろば(広尾)で、25周年の集いを開催。
会場には1982年から2007年までのあゆみの年表と写真や、これまで出版した本127点を展示しました。

◇今のラオスを子どもたちが写真で伝える

子どもたちがカメラでとらえた家族、友だちの写真を展示しました。これは、フォトジャーナリストの押原譲さんによるプログラムで、CECに集まる子どもたちにレンズ付フィルム式のカメラを渡し、各自が思い思いに撮影したものを紹介しました。

ヴィエンチャンでのワークショップ風景

◇子どもの本の足どりをたどる

記念講演では、子どもの歌や絵本などを数多く手がけられている東京家政大学学長の片岡輝さんから、お話をいただきました。世界で初めての子どものために作られた本である、17世紀にチェコのコメニウスが著した『世界図絵』の話から始まり、当会出版の絵本や絵とき辞書などを手に取りながら、会が手がけてきた多様な子ども向け図書についてなど、幅広く子どもをめぐって語ってくださいました。

これを受け、チャンタソンと当会元ラオス駐在の近藤知子との三者で、子どもの遊びや子どもへの支援について語り合いました。

◇紙芝居の取り組みを紹介する

アトラクションとして、「ハイブリッド紙芝居」（土屋悠太郎さん、木村絢園さん）を上演。スクリーンに大写しにした絵と演劇を組み合わせ、「ピーコンコイ」など2作品を熱演し、会場はラオスの民話世界に包まれました。

当会は紙芝居のラオスでの普及を進めてきており、専門家として協力をいただいている、やべみつのりさんから紙芝居について紹介していただきました。

この日、遠方からの方、お久しぶりの方、おなじみの方、合わせて約90人のみなさんにお集まりいただきました。ありがとうございます。

3人によるトークセッション

交流会にて25周年を祝う

ラオスのこども　前史 1975-1982

会が活動を始めるまで、どのような思いがあったのか。
歴史を振り返りながら、チャンタソン共同代表の言葉をご紹介します。

チャンタソン・インタヴォン
共同代表

1975年の社会主義革命後、ラオス政府は、より多くの子どもに初等教育の機会を提供するため、それまでのフランス式教育制度 6-4-3 制を 5-3-3 制に変え、同時に、幼稚園から大学までの教育を、フランス語から一気にラオス語化した。それは植民地時代以来の教育革命であった。これらの急激な変革のため、多くの人々が難民として、メコン河を渡って対岸のタイへ行った。

母国語での教育は独立国家としては当たり前だが、一世紀近くも慣れ親しんだフランス式教育がなくなると、子どもの教育の質が下がるのではと心配する親がいっぱいいた。現実問題、急速なラオス語化のため、ラオス語の専門書や教科書もほとんどなく、先生方は、外国語の本を翻訳しながら、教えるしかなかった。

夫と義母を連れて初めてラオスに帰国した1979年は、実家に夫達を泊めるには、村、町と市の許可が必要なほど、規則が大変厳しかった。

ヴィエンチャンの町にあるのは、国営の本屋さん一軒のみで、売っていた本のほとんどは、ロシアやベトナムのものだった。図書館といえば国中で一つしかなかった。

その2年後、2歳に満たない娘を連れて里帰りした。娘と近所の小学校へ遊びに行くと、小学校の薄暗い教室で、先生は赤ちゃんを抱えながら、色あせた黒板に教科書を写し、教科書を持たない子ども達は、それをノートに一生懸命に写している。勿論教室には本棚も、他の本もなかった。

娘より大きい子が、たどたどしく文字を読んでいたのを見てショックを受けた。娘はまだ2歳未満だが、毎日楽しみに読んで貰った本を、すらすらと読むのだ。それを見て、一人の母親として、娘が体験した本を読む楽しさを何とかラオスの子ども達にも分けてあげたいと思った。

日本へ戻ると、毎日のように、タイの難民キャンプで活動している国際機関や世界中のNGOが競って援助をしているニュースが映されていた。難民だったら第三国へ、タダで行けると知ってか知らずか、政治的な迫害を受けない農民まで、難民として続々と川を渡った時期でもあった。

そのニュースを見るたびに、どうして難民を出さない活動を国際機関やNGOはしないのかと疑問を持った。そして人々が自国に留まるには、やはり国内の安全や、教育などの環境整備が必要だと思うようになった。

私は教育学を学んでいたので、出来るなら子どもの教育環境整備に関わりたいという気持ちを以前から持っていた。

ちょうどその頃、近所の保育園のバザーで、いっぱい売れ残った絵本を見て、とっさにそれを貰い受け、ラオスに送りたいと知人に話したところ、皆が共感してくれ、ラオスに送る費用を寄付してくれたのが、「ラオスの子どもに絵本を送る会」の始まりだった。1982年のことだ。

活動 1982-2007

1980年代 絵本、文具など送り、小学校の校舎建設も協力
1990 ラオス語児童書、『ビックリ星』を出版／政府は移動図書箱プロジェクトを開始。2000年までに全小学校配付(6,340校)を目標
1992 移動図書箱をシェンクワン、ルアンパバン、ヴィエンチャン市近郊に配付
1993 ラオス事務所開設。電話なし／日本の絵本にラオス語を貼って送る活動開始
1994 ラオス初、子ども文化センター(CCC)オープン／図書袋を開発／ラオス事務所で「子ども文庫」開設
1995 学校図書室(HA)、5校開設／絵とき辞書を出版／ヴィエンチャンCCC, 私立学校の校舎から個人の家屋へ移転／ラオス事務所、パソコン購入。専門家派遣セミナー(講師：わかやまけん、やべみつのり)。絵本・こいのぼり、野焼き、語り／東京事務所、有給専従スタッフ雇用
1996 絵画、造形などワークショップ(講師：浅葉和子、尾崎曜子、やべみつのり)／紙芝居セミナー(講師：やべみつのり、長野ヒデ子)。16作品が生まれるCCCは裕福な子どもの習い事となり、訪れる子どもが急減（現地調査より）
1997 文字絵本、数字絵本出版。7人の合作（協力：わかやまけん、大竹雄介）／東京事務所、日常活動の行き詰まり、疲労感。活動を振り返る話し合いを行う
1998 ラオス事務所eメール導入／ルアンパバンCCC開設
1999 「文字絵本3」の挿絵コンクール（協力：わかやまけん、大竹雄介)／NHK新アジア発見「村に本がやってきた―ラオス・ソプターン村」放送
2000 民話絵本コンクール開催／東京の国際子ども図書館に図書寄贈
2001 読書推進活動の自立めざし、全教員養成学校で読書推進セミナー／ラジオ番組制作。子どもによる民話の語りなど
2002 「特定非営利活動法人 ラオスのこども」に
2003 物産展で本を展示。購入の希望多数／ラオス初、ラコンチア（紙芝居）・コンクール(日本の審査員：堀田穣、長野ヒデ子、やべみつのり)、小中高大学生、教員など参加
2004 フランス語センターとの出版プロジェクト。『親指小僧』
2005 学校図書室(HA)、資金調達の現地化
2006 ラオス初、子どもの本をテーマにしたブックフェスティバル開催。1,000人来場
2007 教員養成校で読書推進がカリキュラム化

■読書、CCC 活動によってもたらされるもの

本を読む機会を広げること。そのことに、どのような意味があるのか。私たちは自分の読書経験から、本を読むことで、わくわくする、世界を広げる、想像力／創造力を豊かにする、人に対して思いをはせることができるようになる、などを思ってきました。

ラオスの先生たちからは、文字を覚える、知識が増える、良し悪しの判断ができるようになる、自分で勉強するようになる、落第が減る、学校を楽しみにするようになる、などの声が上がっています。

ラオスの小学校の就学状況を見ると、入学はするものの、3人に1人は卒業に至っていません。小学校で進級試験があるラオス。退学がもっとも多いのは1年生です。先生の教える技術と教材の整備が大きな課題でありながら、そのいずれもが不十分です。そこに本を思い思いに読むことができる場を設け、先生が読み聞かせの技術を身につけることは、大きな意味があり、様々な成果に結びついているといえます。

また、ラオス各地の CCC は、子どもの居場所であり、創作活動の場であり、自主活動やボランティアにつながる場で、これを教員の研修と結びつけたのがヴィエンチャンの CEC(子ども教育開発センター)です。

本を読むことや生徒による図書館活動、そして様々な活動は、ライフスキル（生活技能）を身につけるものともいえます。意思決定、問題解決、批判的思考、対人能力、自己認識、共感、感情への対処などをWHO（世界保健機関）では生活技能として挙げています。当会が参加する JNNE(教育協力 NGO ネットワーク)では、文部科学省との事業で『ライフスキル教育マニュアル・読書推進編』（日本語版および英語版）を作成中で、教育支援に取り組む団体などに、読書推進の実践的な取り組みを伝えていきます。

今日、世界の国々と国際機関は、2015 年までにすべての子どもが学校で学べるようになることを約束しています。その達成のためには、学校を建てるだけではだめで、教育の質の確保が欠かせません。当会が進めてきた読書推進活動と CCC の活動は、そこに貢献するものと考えることができるのではないでしょうか。

■これからに向けて

1990 年にラオスの国家プロジェクトとして始まった図書箱配付活動は、教員養成校での読書指導科目のカリキュラム化を実現しました。また、当会の発案によって 1994 年に発足した CCC 活動は、今日では全国に普及させるものとして、ラオス政府によって位置づけられています。これらが政策に組み込まれたことは大きな成果といえます。

今、当会が取り組みの方向として見つめているのは、現場重視、質の向上、より必要性の高い対象への支援、子どもの参加、担い手の育成です。

先生や CCC スタッフの意欲を刺激すること。出版する本の内容をもっと充実させること。そして、例えば、少数民族の子どもたちが学校教育から離れることなく学べること。学校へ行けない子どもたちが学べること。CCC の活動などに子どもがより積極的に参加できること。これらを通して担い手が輩出することをめざします。

どうぞ、今後とも、ご支援をお願いいたします。

子どもたち、先生の声
CCC(子ども文化センター)、子ども文庫、学校図書室を利用して

質問 ： CCC は好きですか？

- 「いろいろな県からたくさんの子が来て友だちがいっぱいできました」（小学 4 年生）
- 「CCC にはたくさんの色鉛筆があって絵を描いています」（小学 5 年生）
- 「CCC に行っていた弟が歌を聞かせてくれて、私も行くようになりました」（小学 4 年生）
- 「CCC がなかったら何をしていたか想像できません。表現する自信もつきました」（中学 1 年生）

質問 ： 本を読むのは楽しいですか？

- 「12 歳から会の子ども文庫のメンバーです」（18 歳）
- 「自分がすっかり主人公になりきって喜んだり、悲しんだり。将来は作家になるのが夢です」
- 「暇があると図書室に行き、算数やいろいろな勉強をします。成績も上がりました」（9 歳）
- 「こんなにたくさんの本を自分が生きている間に読めるとは」（教員）

プロジェクトの報告

出版プロジェクト

『ラオス語辞書』(改訂版)

執筆：マハーシラー・ヴィラヴォンス
382頁、800部（株式会社まるやま）
大人向けのラオスでは数少ないラオス語辞書。1962年に出版、国立図書館に1点のみ所蔵されたものを復刻。1万語以上収録。印刷費用のみ支援。

『リズムで学ぶラオス語』

作：マハーシラー・ヴィラヴォンス
挿絵：ヴォンサワン　ダムロンスック
72頁、8,000部☆
就学前から小学校低学年対象の教材本。文字ごとに同じ音の単語を並べた詩が添えられ、ラオス語の特徴である韻をふんだ詩で、リズミカルにラオス語が学べる。

『短編集　10月1日』

作：スックパンサー　他6名
112頁、5,000部◆
若手作家発掘育成の「創作文学コンクール」（06年～07年当会実施）の入賞作品集。表題作「10月1日」は短編小説の第一位作品。

『動物のたのしいお話』

作（英文）：フィリップ・ギブソン
ラオス語訳：ダラヴォン・カンラヤ
挿絵：サイサロン・ペッドゥワンカム
116頁、5,000部◆
小学校高学年～中高校生向け。世界の様々な動物が、何を食べ、どのような生活をし、どのくらい生きるのかなど、動物の生態を先生と生徒の会話から学ぶ。英語教材を翻訳。

『子ザルのまほうのしっぽ』◎

文：ヴィタニャコーン・ピッマヴォン
絵：サワンサイ　スーワンペン
20頁、7,000部（沖電気工業株式会社OKI愛の100円募金）
小学校低学年向け。2人の学生による作品。黄色いトラに襲われているサルのリーダーの子が、まほうのしっぽを得て、トラをやっつける。

『一枚の絵』◎

文：チャンダラー・スワンナラード
絵：ケオマニー・スワンナラード
16頁、5,000部◆
小学校低学年向け。ボリカムサイ子ども文化センターのスタッフと、その妹による作品。おじさんから自然や衛生について学んだ兄妹がバラの絵を描き、自然をこわさずに花で家を飾る。

『誰のしっぽ?』◎

文・絵：パスリニャー・カンタヴィライ
20頁、5,000部◆
小学校低学年向け。高校生の作品。2人の小学生が、しっぽの特徴をヒントにクイズ形式で様々な動物について学んでいく。載っているのはすべて絶滅危惧種。教材として活用しやすい。

『お母さんのしっぽを探せ』◎

文・絵：センスリー・カッティニャサック
13頁、5,000部◆
幼稚園児向け。色鉛筆で描かれた絵が優しく子どもたちに話しかけるような作品。森でお母さんゾウとはぐれた子ゾウが、しっぽを頼りにお母さんを探していくお話。

『図書活用マニュアル「小学生のための言語習得」』

作：ダラー・カンラヤ、ドアンドゥアン・ブンニャボン
102頁、5,000部（地球市民財団3,800部、当会2,000部）
小学校の授業で絵本を教材としてどう取り入れるか、ラオス語習得にどう図書を利用したらよいかをまとめた教員向けマニュアル。出版した絵本4点による実践例を紹介。現場ですぐに活用できる。

☆はJICA草の根技術協力事業5,000部、当会3,000部
◆はJICA草の根技術協力事業3,000部、当会2,000部
◎はいずれも「手づくり絵本大賞」（岐阜県可児市）応募作品

読書推進プロジェクト

今期、新しく開設した学校図書室を紹介します！

＜ノンポーン民族小学校／ハックアーン(HA)166＞
所在地：ボリカムサイ県カムクード郡ノンポーン村
生徒数 ： 258人
ハックアーン設置図書数 ： 218タイトル530冊
支援 ： 株式会社リコー社会貢献クラブFreeWill

2007年10月3日（水）、学校図書室（ハックアーン）の開設で、ボリカムサイ県のノンポーン民族小学校を訪ねました。
ノンポーン民族小学校があるラックサオのまちはヴィエンチャンから車で7時間ほど。切り立った岩肌が迫る山々は素晴らしい眺めです。 村の中心からベトナム国境まで約1時間。 ベトナム語の看板や車も目立ちます。

校舎は2006年にベトナムの支援で建てられたばかり。珍しく2階建てです。1階が教室、2階が職員室や生徒たちの寮です。モン族など少数民族の生徒が多く、敷地内にもう一つ生徒用の寮と孤児のための奨学生寮もあります。
この日、218種類530冊の本（CD、ポスター、地球儀含む）を届け、念願の図書室が校舎2階に開設されました。開設式には教育局関係者や学校職員、村長ら村人など54名が参加しました。

式の後は近隣の学校の先生方も参加して、図書活用のセミナーを開催。 講師は国立図書館職員ラソーイさん。 図書の登録方法、 貸出カードの記入、 貸出・返却、 利用者の記録管理など実務を指導しました。

雨季の終わりごろのせいか、 雨交じりの肌寒い天気。 けれど、 村人も図書室の準備をのぞきに来たり、 生徒たちはオープンが待ち遠しいのか、 次々に運ばれてくる本が気になる様子。 カムマン校長をはじめ先生たちはニコニコしながら本を手にとり、 早く子どもたちに読ませたいと話していました。 ノンポーン民族小学校、そしてカムクード郡に初めてのライブラリーが誕生しました。(報告:関千春、写真:押原譲)

ラオス事務所が発行する読書推進ニュースレター
「デックノーイラオ(ラオスのこども)」 第３号発行

子ども向け読み物やクイズを載せたり、学校の先生には教材としても使える「デックノーイラオ」の第３号(2007年６月発行)。その一部をご紹介します。

＜主な内容＞
・草原の詩・ウクライナの童話「手袋」・インタビュー、読み聞かせボランティア、ラーパスックさん・読書感想文・わたしたちの質問・「108のしてはいけないこと」・第２回こどもブックフェスティバル・第１回優良図書コンテストの結果・全国ハックアーン会議・紙芝居実演トレーニング・サンシンサイの詩（ラオスの英雄伝）・お父さん・お母さんの学校「子どもに徳を積むことを教える」・みんな知っているかな？「レンコンの糸で織った布」・新しい図書の紹介

◇お父さん ・ お母さんのための学校
「子どもに徳を積むことを教える」 より

物を施すとき、価値は重要ではありません。気持ちが大切なのです。お父さん・お母さんは子どもに教えることができます。 もし元気がなく、お金がなくとも徳を積むことができます。施しの気持ちがあれば、年齢・名誉・地位は関係ありません。精神が大事です。 気持ちがあるなら、お金以上の価値のあるものを施すこともできます。皆のために犠牲になること、 他者を助けるために自ら汗を流すことも徳を積むことの一つ。子どもでも毎日の生活でできます。ゴミを拾う、 荷物持ち、盲人の道案内、植樹など。

他者を助けることは自分を守り、人の嫌がることをせず、公衆の利益を求めることが基本。生き物を殺さないこと、盗みを働かないこと、嘘偽らないこと、他者が大切にしている物・者を侵さないことを「シン」（日本語で「戒」「戒律」）と呼びます。

両親が子どもに公衆に迷惑を掛けないよう教えることは、子どもに近づく小さな悩みや迷いから大きな過ちを引き起こすことを防ぐバリアーとなるのです。子どもが友達のペンを盗んだり、 宿題をカンニングしたら、両親は子どもに無関心ではいけません。

善行は、自分を助けることになり、 周囲を幸福にします。規則正しい生活、正しく物を使うことは「シン」と呼ぶ振る舞です。高価な物を食べない、派手な生活をしない、体に良い物を食べる、ハイテク製品の適した使用も含んでいます。仕事中に電話をかけない、ゲームで遊び過ぎないことなど。 規律ある生活ができたら、次は正しいお金の使い方・節約を教えましょう。悪い風習(賭け事、娯楽） に染まらないように教えなければなりません。

ラオスでの研修

学習院女子大学ラオス国際協力研修報告

2007年8月、学習院女子大学の学生たちがラオスで国際協力の現状を知り、学ぶ体験を行いました。帰国後、彼女たちはラオスを知らない人たちにもその様子を伝えています。

お互いの文化を尊敬し、自分の文化の大切さに気づく

トイレ無し、外国人受け入れ初めての村で4日間のホームステイ――。私たちは「現地で、国際協力とは何かを、自分なりに考える」という趣旨の大学の研修（全日程10日間）に参加して、ラオスの人々の温かさを強く感じるとともに、自国の文化を見つめ直すきっかけとすることができました。

村に滞在中は土地の人と同じように畑に行ったり、水浴びをしたりと日本ではできないことをたくさん経験し、村の人にも日本の文化を知ってもらおうと、素麺や白玉など日本の料理を作ったり、事前に学んだワラジ作りを一緒にしました。私たちが初めてわらじを作ったときは、思い通りの形に仕上がらず、いびつな作品が多かったのですが、村の人々は驚くほど上手く、楽しそうに作り、私たちもとても嬉しくなりました。

お互いがお互いの文化に興味を持ち、その素晴らしさに触れ、それを感じることで、あらためて自分たちの文化の大切さを知り、考えることができるのではないでしょうか。村の人々と生活をして、人と人との繋がりをとても強く感じ、誰に対しても優しく温かく接してくれる姿を見て、私たちの生活のあり方（ご飯を家族みんなで食べなかったり、部屋が分かれていて自分だけで過ごす時間が多かったり、近所の関わり合いが薄れていたり）を考え直しました。時間に追われ、自身の生活や文化をあまり考えることのない私たちにとって、今回の経験はとても大きなものとなりました。

ラオス渡航前、学生が身近にできる国際協力の一つとして「フレンドペンケース運動」を行いました。これは、学生から布と文具を集め、その布でペンケースを作り、鉛筆、消しゴムを入れて村の小学生に贈呈するものです。目的は不足している筆記用具を子どもたちに寄付し、意欲的に勉強に取り組んでもらうこと、協力してくれた学生にラオスについて知ってもらうことです。一昨年のラオス研修から始めて、日本にいながらにしてできる持続可能な国際協力として、これからも続けていきます。ラオスは私たちにとって第二の故郷です。コイハックラオ！（ラオス大好き）

（報告：中本彩香、岡崎恵子、斉藤香織／学習院女子大学）

夢の実験室 Wa！

ラオスの文化を多面的に語り合うイベント

メコン川と豊かな森の恵み、母から娘へと受け継がれる織物、男の子の出家など、ラオスの文化を多面的に語り合うひとときがありました。10月27、28日に東京・駒場のビルのフロアを会場にした「異国の風号」地球旅行、でかけヨット＜ラオスへの旅＞（主催：夢の実験室＜Wa！＞）というイベントです。

例えば、ラオスのソムパーは琵琶湖のふなずしのルーツという説が、新倉俊子さん（リバー・リバイバル研究所）から紹介され、双方の水田と、魚を取って、仕込み、食べるまでを映像で見ることができました。ラオスと琵琶湖が交互に映像で流れ、いつのまにかどっちがどっちかわからなくなるほどに、アジアの共通性が見て取れました。

また、ラオス留学時代に出家の経験をした光本政彦さん（外省）は、袈裟の着付けを少年僧に教わり、早朝の托鉢に向かった話をしてくれました。日本の大学に学び、今は日本企業に勤務するラーさんは、高校時代、悩み事があるとお寺に行って、お坊さんに相談したとのことでした。

そしてチャンタソンは、ラオスの様々な民族固有の織物のデザインを紹介しました。

日本との共通点と日本が置き忘れてきたもの、日本にはない文化が語り合われました。

国内の活動

2007年6月～10月

麻布十番納涼祭り、無事3日間が終了！

ある時は無心に缶切りで缶開け。ある時は無心にココナッツミルクを煮立て、ある時は売り子としてタピオカココナッツ（ナムワーン）を威勢良くアピール。翌朝は留学生を馬込のボランティア作業場までお迎えにと、日々〝てんやわんや〟の状況に追われながらの3日間が終わりました。例えば、「ラオスのハーブで揚げたチキン」を「ラオスで揚げたチキン」と言ってしまったり、「ライスが売り切れ」を「ラオスが売り切れ」と言い間違いしている方を見たり…。

今年初参加の私にとって、3日間の命綱はなんと言っても、屋台のメインメニュー兼賄いのラオスカレー！ 何度あのスパイシーな味に救われたことでしょう。日本のカレーではもう物足りないかも（笑）。調理・販売の手伝いでいろいろな人と出会い、話をする機会もありました。自分のことで手一杯でしたが、多くの人たちから体調を気遣った声を掛けてもらいました。国際バザール内で、こんなにも数多くの人が協力し合って成り立っている店は、とても珍しいのではないでしょうか。素敵ですね！気が早いのですが、来年更に良いお店作りが出来るといいなと思っています。でも、そう考えている今も「ラオスカレー食べたいな～」と思っている私…。本当にラオスカレー大好きになってしまいました。（東京事務所インターン・　山﨑麻友美）

総　会

2007年度通常総会を9月8日（土）にライフコミュニティ西馬込で、活動会員31名（うち、8名書面評決、2名委任状）、サポーター（賛助会員）2名、ボランティア1名参加のもと開催されました。

プロジェクトのシステム化と人材育成は進捗していることが報告されました。しかし、ラオスの社会状況が変化し、子ども達の環境も多様化するなか、組織運営の強化などが不十分であることが説明されました。また、第5期事業報告・会計報告が承認されました。

監査報告では、会計業務の改善・強化、会員確保や資金調達が不十分との指摘がありました。理事会より選任された今年度の役員の人選があり、理事及び監事が承認されました。続いて、2007年度の事業計画・収支予算の報告を行いました。

総会終了後、参加者らは交流会を開催、和やかな空気に包まれながらの歓談でした。

活動報告、会計報告などは別途2006年度年次報告書をご覧下さい。

イベント

●ラオスフェスティバル

9/22-23 代々木公園（東京都）

主催：ラオス大使館ほか

ラオスをテーマにしたイベントが開催。ラオス料理や伝統工芸品を売る店が並び、ステージでは民族舞踊やバーシー儀式などが催されました。当会は現地出版のラオス語図書を販売し、在日ラオス人やラオス語を勉強する日本人に好評でした。

●グローバルフェスタJAPAN2007

10/6-7 日比谷公園（東京都）

主催：外務省、JICAほか

2日間で約7万9000人が来場する日本最大の国際協力イベント。一般展示ブースで、活動展示や手工芸品・ラオス語図書販売を行いました。この会場でも、図書はとても人気でした。ボランティア13人が参加してくれました。

●異国の風号・地球旅行でかけヨット「ラオスへの旅」

主催：夢の実験室Wa!　本誌P8で紹介

ラオス語絵本プロジェクト

●沖電気工業株式会社

7/7「第8回ラオス語絵本を作ってラオスの子どもたちに送ろう」

社員のみなさんやご家族、ボランティアなど合計31名が参加。60冊の絵本にラオス語翻訳を貼りました。OKIグループは、これまでイベントを7回実施し、合計322冊の絵本をラオスに送っています。当日はクイズや映像紹介、ラオス社会の移り変わりを説明。ラオスコーヒーやラオス菓子も味わってもらいました。

●学習院女子大学

7/13　ボランティア実習

授業の一環として、大学構内でラオス語絵本貼りイベントが行われました。

実習生のみなさんは絵本集めや広報など事前準備に尽力し、学生19人が参加。森代表の講義の後にラオス語絵本貼りを実施しました。

支援者のおたより

ラオスのこどもの活動を支えてくださる方々の活躍をご紹介します!

念願?叶って、ラオスで日本語教えています

自分は学生時代、中国の武漢大学へ留学しました。留学生宿舎にはラオスからの留学生が大勢いて、毎週末開くパーティに誘われては彼らの部屋へ遊びに行っていました。帰国後も連絡をとり続け、気がついたらラオス語を勉強し始め、「ラオスのこども」にもボランティアとして参加するようになりました。大学卒業後、日本語教師養成講座を受け、2007年1月からヴィエンチャンで日本語を教え始めました。

教え始めたばかりの頃は本当に四苦八苦して、激やせ（約8キロ減）もしました。でも、日本で勉強してきたラオス語が大分役に立っています。教え子の学生以外にも学校の事務員さん、英語の先生たち、英語を勉強しに来ている子どもたちともコミュニケーションが取れて、今では毎日を楽しく過ごせています。

この1年ラオスで生活してみて「今、ラオスの若者に対して感じていること」について率直に述べさせていただきます。

まず、「受け身の姿勢」。学校では「教師が全部説明して、学生は自分で考えずに話しを聞くだけ」という雰囲気を感じます。

また、授業に限らず何に対しても「現状維持でいい」という雰囲気も感じます。ハングリー精神とまでいかなくても、ちょっと向上心があればずっと良くなるのにと感じることもあります。とくに語学は授業だけでは教えきれないものも沢山あるので、学生にはもう少し貪欲になって欲しいと日々感じています。

（脇田俊文／活動会員、ヴィエンチャン在住）

※首都ヴィエンチャンで日本語を教えている脇田さん（写真・一番左）は、日本にいた時も積極的に当会のボランティアに参加。現在ラオスでも翻訳の手伝いをしてくださっています

身近なところに自分ができる事は沢山ある

最近まで、私はボランティアとか募金に興味を抱けませんでした。困っている誰かを本当に助けたいと思ってもいないのに慈善活動している自分がいると、自分の中に矛盾が生じて、自分に嘘をついている気がして。ボランティアをしている人は、どういう気持ちで活動しているんだろうと思っていました。

しかし、大学に入り、どうしようもなく辛い時に沢山の人が私の事を心配してくれ、心の支えとなってくれました。本当に涙がでるくらいに嬉しかったのです。そういう事があったからか、今度は私が困ってる誰かを助けたい、私だって誰かの力になれるんじゃないかと思いました。そして、生まれて初めて参加したのが、ラオスのこどものボランティア活動でした。それは得るものが多く、とても貴重な経験となりました。

麻布十番祭りでは、蒸し暑い部屋で汗水垂らしてラオス料理を大量に作り、お店ではからからになるまで声を張り上げて売っていく。そういう作業が苦にもならず行えたのは、一つの思いがあったから。「一人ではあるけれど、自分が頑張れば頑張った分だけ、最終的に一冊一冊と本という形になって、遠く海を隔てたラオスに生きる子どもたちの人生を少しでも豊かにできる事につながるんだ」。そう強く強く実感できました。

相手は顔も名前も知らない人間、会ったこともない人間ではあるけれど、そういう事は関係なくて誰かの力になれるんだと思えた瞬間、生き甲斐を感じました。直接的ではないかもしれないけれど、こういう事が日本にいて私達ができる事なんじゃないかなとも感じました。活動に参加させてもらって、本当に良かったです！

（阿部くみこ／大学生）

おたよりから　事務局に寄せられた声を一部ご紹介します

- お体に気をつけて活動なさって下さい。（T・T）
- 25周年おめでとうございます。ラオスがどんどんよくなっていますね。益々のご発展を。（N・N）
- いろいろな本をたくさん読んでほしいので、ラオスのこどもの会を通じて応援しています。ラオスに行きた〜い！（N）
- 継続は力と申しますが、四半世紀にわたる活動は山あり谷ありで、みなさまのご労苦には計りしれないものがあったと存じております…。（Y）
- ラオスのこども25周年の集いへのお誘いを頂き、充実した発展のお姿に心からお祝い申し上げます。（S・M）